

大学史編纂課だより

第3号

2012年2月29日 発行

目次	
調査収集	連載
◇日大三高野球の源流を訪ねて…………… 2	◇日大・オリンピック②…………… 4
◇兵庫県の生んだ政治家－原惣兵衛と河本敏夫－…… 3	◇太平洋戦争と学徒②…………… 5



学祖終焉の地に行く（兵庫県朝来市）

山田顕義は、萩・山口から帰京の途中、生野での挙兵に失敗し、この地で自刃した又従兄河上弥市らが祀られる山口護国神社（朝来市山口 写真上）へ参拝に立ち寄っています。境内には、かつて戊辰戦争で山陰道鎮撫総督としてこの地を訪れた西園寺公望による志士たちの碑も建立されています。

山田は、この後視察のため生野銀山に行き、太盛三番坑の入口付近で倒れるのです。本学創立100周年を記念し、史跡生野銀山入口付近に建てられた「山田顕義終焉之地」碑は、平成23年（2011）4月、地元生野町により、JR生野駅西口前広場（朝来市生野町口銀谷 写真右）に移設されました。



調査収集 日大三高野球の源流を訪ねて

日本大学第三高等学校（以下日大三高という）野球部は、周知のように甲子園に春18回、夏14回の出場を誇る、高校野球の名門校です。昨年の第93回全国高校野球選手権大会において、平成13年に続き夏2度目の全国優勝を遂げ、春と合わせると3度の優勝を果たしています。このような最近の快挙は、小倉全由監督の厳しい指導と選手の日頃の練習の成果によって達成されたことは言うまでもありません。

しかし、その栄光の背景には、多くの先人の努力によって築き上げられた日大三高野球部の歴史と伝統があることも見逃せないでしょう。なかでも日大三高野球部の基礎を築いた鎌田彦一元校長の功績は大いに注目すべき必要がありましょう。

大学史編纂課では、昨年12月21日に、大学史編纂課長、筆者が日大三高を訪れ、鎌田彦一元校長の調査を実施しました。

鎌田は、明治19年（1886）1月に、青森県弘前市に生まれました。弘前中学卒業後、一時内務省に勤めましたが、大正4年（1915）に日本大学職員となりました。昭和4年（1929）に赤坂中学が本学の傘下となり、日大三中となると昭和6年に同校に勤務を命じられています。



グラウンドを見つめる鎌田彦一先生の胸像

当時の三中は、赤坂中学から本学の付属校となつてすぐのことで、校内は荒んだ状況にありました。鎌田は、これを立て直すためには、野球を通じた人間形成が必要だと考え、野球を教育に取り入れたのです。そして、甲子園出場に並々ならぬ情熱を注ぎ、法政大学時代に名捕手として活躍し、人格と見識共に優れた藤田省三（後のプロ野球監督）を監督に招きました。

当時はまだ専用球場はなく、他校のグラウンドを転々としながらの練習でした。藤田は厳しい練習を選手に課し、また、鎌田も暇さえあれば練習場に赴き、選手を激励し続けました。その努力が実り、昭和13年（1938）春の選抜大会に初出場を果たし、その年の夏の甲子園にも初出場することができました。続いて昭和14年の選抜にも2年連続して出場し、昭和15年の夏には、甲子園で準々決勝まで進んでいます。

太平洋戦争が激しくなると、戦時体制が強化され、公式試合は中止となりました。しかし、鎌田は、「野球は人間形成のためにやるのであり、大会があろうとなかろうと問題ではない」と述べ、日大三中は昭和18年秋まで合宿や練習を続けました。戦時下においても野球を通じた教育を実践したのです。

戦後も鎌田の野球に対する情熱は衰えることなく、昭和27年（1952）の選抜で、戦後初の甲子園出場を果たし、その年の夏も出場しました。昭和31年には、ようやく調布に専用球場である「鎌田球場」を設け、これにより選手は落ち着いて、練習を行うことができるようになりました。昭和30年代には度々甲子園に出場し、昭和37年（1962）の春の選抜では準優勝し、名門校として定着しました。甲子園での鎌田の応援は独特なもので、指笛をピー、ピーと吹き鳴らしました。その音は反対側の応援席まで響き渡り、「指笛の校長」として有名となっています。

鎌田は、甲子園での全国優勝を待ち望んでいましたが、それを見ることなく、昭和41年（1966）に亡くなりました



甲子園で活躍した4選手と新井勇治教頭（右から2番目）、筆者（右端）

た。しかし、鎌田の野球に対する精神は、その後も監督、選手に受け継がれ、昭和46年に春の選抜大会で初優勝を遂げ、平成に入り2度の夏の大会制覇という、さらなる強豪チームへと発展しています。

三高野球部の強さを探るべく、昨夏の甲子園で活躍した3年生のうち4選手に、練習を中断して取材に協力していただきました。彼らによると、監督の指導、練習の成果、和の精神、三高野球の伝統、これらがかみ合って後身に引き継がれていることが日大三高野球部の強さであるといいます。

その最たる慣習として、選手はバックネット裏に設置された鎌田の胸像に、練習の前後に挨拶をしています。また、野球部専用のグラウンドは、東京都大会の決勝戦を意識し、神宮球場と同じ向きに設置されていました。甲子園から持ち帰った砂とともに選手の練習環境としては申し分がありません。さらに、取材中の4選手の真剣な姿、そして鋭い眼光で相手を直視して話をしていることが印象的でした。

本年4月からは、別々の進路で野球を続けるということですが、彼らの新天地での活躍を願うと共に、いずれはプロ野球の世界で活躍して欲しいと期待しつつ、日大三高野球部の伝統とその継承についての取材とさせていただきます。最後にお忙しいところ、ご対応いただいた日大三高の諸先生、野球部関係者の皆様に感謝申し上げます。
(小松、F)

兵庫県の生んだ政治家—原惣兵衛と河本敏夫—



原惣兵衛 銅像

日本大学からは、多くの政治家を輩出しています。今後、その調査も重要なことと考えており、昨年10月に兵庫県で、原惣兵衛と河本敏夫の調査を実施しました。

原惣兵衛は、明治24年(1891)1月に赤穂郡上郡町竹万に生まれました。大正4年(1915)に日本大学専門部法律科に入学し、在学中は雄弁会の中心人物として活躍しています。大正9年に弁護士試験に合格し、翌10年(1921)には日本大学海外留学生としてドイツで、法律学と政治学を学びました。

帰国後の大正13年5月に衆議院議員に当選しています。以降昭和20年12月まで6回の当選を果たし、昭和18年には姫路市長に就任しています。政界においては、その負けん気の強さから「喧嘩惣兵衛」の異名をとりました。将来を期待されていましたが、昭和24年(1949)1月に59歳で亡くなりました。原の銅像は、昭和34年(1959)4月に赤穂郡上郡町の大避〔おおさけ〕神社境内に建立されました。碑銘は日本大学名誉総長山岡萬之助の揮毫によるものです。

河本敏夫は、明治44年(1911)6月に兵庫県揖保郡神部村那波野(現相生市)に生まれました。昭和4年(1929)に、姫路高校を「反戦演説」によって放校処分となりました。昭和6年に原惣兵衛を頼って日本大学に入学し、卒業後の昭和12年に三光汽船の社長に就任しています。

昭和24年(1949)1月に河本は原惣兵衛の地盤を受け継いで、衆議院議員選挙に当選しました。以降連続17回当選し、その間郵政大臣、通産大臣、政調会長、経済企画庁長官などを歴任しました。三木派を継承して河本派を発足し、自民党総裁の有力候補ともなりました。感情を表に出さないことから、「笑わん殿下」の異名をとっています。平成8年(1996)政界を引退し、同13年5月に亡くなりました。彫刻家熊谷友児の制作による河本の銅像は、平成15年5月に相生市那波南本町の中央公園に建立されました。
(小松)



河本敏夫 銅像

連載 日大・オリンピック②

昭和11年（1936）の第11回ドイツベルリン大会は、「ヒトラーのオリンピック」と呼ばれるように、国民の圧倒的な支持を得て総統となったアドルフ・ヒトラーが、国家の威信を賭けた一大セレモニーでした。また、この大会で、聖火リレー・記録映画・テレビ中継が初めて取り入れられました。

第10回ロサンゼルス大会で大躍進した日本は、第12回大会開催地が東京と決定していたこともあり（「幻の東京オリンピック」となりました）、ベルリン大会へも249名の大選手団を派遣しました。参加競技も陸上・水泳・漕艇・ホッケー・体操・レスリング・ボクシング・馬術に加え、サッカー・バスケットボール・ヨットに初参加しています。

本学からは、マラソン代表に鈴木房重（16年法文学部法律学科卒業）、水泳に遊佐正憲・葉室鉄夫（15年商経学部経済学科卒）、飛込みに柴原恒雄（15年商経学部経済学科卒）、競歩に奈良岡良二（法文学部）の5選手が出場しています。

鈴木は、箱根駅伝第16回（昭和10年）から第19回まで、5区の走者として区間新・区間賞を獲得する活躍で、本学4連覇達成に貢献した長距離専門選手。オリンピック候補対抗マラソンで、世界最高記録を出した池中康雄選手に次いで2位となり、ベルリン大会日本代表になりました。しかし、ベルリン入りしたのちに高熱を発して体調を壊す不運に見舞われ、マラソンから急遽10000mにエントリーすることになったのですが、残念ながら記録が残っていません。

遊佐は、100m自由形では銀メダルでしたが、杉浦重雄（静岡中出身）・田口正治（立教）・新井茂雄（浜松農出身）と組んだ800m自由形リレーでは、ロサンゼルス大会に続いて世界新記録を出して金メダルを獲得。葉室は200m平泳ぎで金メダルを獲得しました。ドイツのエルビン・ジータスと接戦を演じた決勝戦では、ヒトラーも観戦しており、表彰式での君が代演奏に際してはヒトラー自身起立して敬礼し、葉室の

栄誉を称えたといわれます。

柴原は、日本学生選手権大会飛込でも圧倒的な強さで連勝していた選手。ベルリンでは、飛板4位・高飛込6位の成績でしたが、いずれも日本の五輪飛込の最高の成績です。

競歩は、前回大会から50km競歩として復活した種目で、奈良岡は日本選手として初めて出場しました。強豪揃いの欧州勢の中、結果は19位（完走26人）でしたが5時間7分15秒の日本新記録でゴールしました。この後、日本競歩界は1964年の東京オリンピックまで28年間、選手を送り込むことはできませんでした。

（田淵）



『報知新聞』号外 昭和11年8月16日付（裏面）
荒川区立荒川ふるさと文化館所蔵
皆川号外コレクション

日本選手メダリスト

遊佐正憲・杉浦重雄 田口正治・新井茂雄	競泳男子800m自由形リレー
葉室鉄夫	競泳男子200m平泳ぎ
前畑秀子	競泳女子200m平泳ぎ
寺田 登	競泳男子1500m自由形
田島直人	陸上男子三段跳び
孫 基禎	陸上男子マラソン
遊佐正憲	競泳男子100m自由形
髙橋俊平	競泳男子400m自由形
原田正夫	陸上男子三段跳び
西田修平	陸上男子棒高跳び
新井茂雄	競泳男子100m自由形
牧野正蔵	競泳男子400m自由形
清川正二	競泳男子100m背泳ぎ
小池禮三	競泳男子200m平泳ぎ
髙橋俊平	競泳男子1500m自由形
南 昇竜	陸上男子マラソン
田島直人	陸上男子走り幅跳び
大江季雄	陸上男子棒高跳び
藤田隆治	芸術競技絵画
鈴木朱雀	芸術競技水彩



『日本大学新聞』第264号
（昭和11年10月10日付）

② 太平洋戦争と学徒②

昭和16(1941)年10月16日に公布された「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」及び「昭和十四法律第一号兵役法中改正法律中改正ノ件」により、大学・専門学校などの修業年限が6ヵ月以内短縮できることとなり、在学生の徴集延期の年齢も1歳ずつ引き下げられました。その結果、昭和16年度の卒業式は3ヶ月早まりました。日本大学では日米開戦間もない12月27日・28日に挙行され、卒業生と在学生の徴集者対象の内、徴兵検査合格者は陸海軍に進みます。

海軍では、昭和16年度卒業予定者までを対象に16年10月21日に第1期兵科予備学生の募集を告示しました。これは予備役予備士官養成のための航空予備学生(飛行科・整備科)を発展させたもので、幹部候補生制度のあった陸軍同様に、高等教育機関出身者を多方面の分野で第一線部隊指揮官として活用するために取り入れた制度です。彼らは、陸戦・対潜・暗号、採用数が増えた海軍兵学校生徒や飛行予科練習生などに普通学を教える教官といった、既存の海軍士官の専門から外れた分野に配属され、活躍することとなります。

この頃、歯科医武官も誕生しました。陸海軍とも医師は明治前期から武官(軍医)でしたが、歯科医は嘱託や文

官のみで、歯科医師が幹部候補生となっても資格を活かせませんでした。昭和15年3月、陸軍では衛生部に歯科医将校を新設しました。翌年、歯科医学専門学校生から、在学中に軍が手当てを支給し卒業後に歯科医将校となる依託生徒を採用。16年度卒業生を対象とした第1期生は5名で、日本大学専門部歯科在学中の千葉栄一も選ばれました。16年6月には海軍でも歯科医科士官が制度化され、3名の依託学生第1期生の一人として、千葉と同期の浅野頼雄が採用されました。

繰り上げ卒業となった彼らは、17年1月、千葉は衛生部見習士官(後に陸軍歯科医大尉)、浅野は歯科医少尉候補生(後に海軍歯科医大尉)となり、初の歯科医武官となりました。(高橋)



昭和16年度卒業式の記事
『日本大学新聞』373号(昭和17年1月10日付)
三崎町校舎の父兄代表は航空総監土肥原賢二陸軍大将

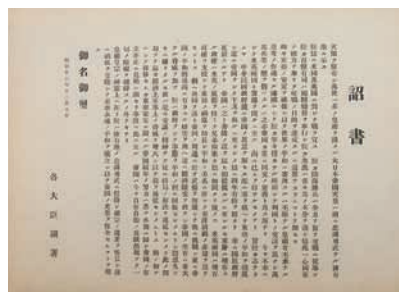
所蔵資料 学祖墓所発掘調査関係資料

平成22年11月、医学部押田茂實教授(現日本大学名誉教授)より、護国寺の学祖墓所整備に伴う学術調査関係資料の寄贈を受けました。この調査は、昭和63(1988)年~平成元(1989)年に実施されたもので、医学部・歯学部法医学教室が中心となり、法医学・解剖学・歯学・人類学・服飾衣学・植物学・地質学など幅広い分野の研究者約50名が参加しました。

本調査では、学祖山田顕義の右側頭骨部に穿通性の骨折があることなど多くの新発見がありました。今回寄贈を受けた資料には、これまで医学部法医学教室で保管されていた学祖遺体の全身レントゲンや毛髪分析資料、墓所発掘時の調査写真などが含まれています。

この資料は学祖関連資料としても重要ですが、総合大学としての利点を活かした「学祖墓所発掘調査」という調査自体を後世に伝えていくためにも重要な資料といえます。

(松原)



日本大学高等師範部修身公民科
卒業アルバム(昭和16年12月)
冒頭には開戦の詔勅が掲載されている



学祖墓所発掘時の様子(寄贈資料より)

所蔵資料 鹿児島鎮定諸将昇級賜賞牌之図

この錦絵には、西南戦争で功績のあった高官たちに対する褒賞の場が描かれています。右奥は明治天皇と太政大臣三条実美や右大臣岩倉具視といった重臣たち、中央から左は褒賞の対象となる参議（政府閣僚）や陸海軍の将官たちです。諸将たちは人物ごとの氏名は表示されていませんが、山田顕義の名も連なっています（左下写真）。

明治10（1877）年2月の西南戦争勃発時、山田顕義は司法大輔の職に就いていましたが、現役の陸軍少将でもあり、3月には別働第2旅団司令



長官に任ぜられ、熊本県八代に上陸しました。そこから南九州の各地で西郷軍と戦い、10月4日、東京に凱旋しています。

作者は、幕末から明治前期に活躍した狩野派の浮世絵師小林秀次郎で、この作品では鮮斎永濯の号が使われています。届出は同年10月となっていますが、11月に凱旋する将官たちも登場しています。実際にこれに類する行事は催されていますが、永濯の想像で描かれており、同時期の楊洲周延にも同様の作品がみられます。（高橋）

清水多嘉示資料展（武蔵野美術大学）

昨年の夏から秋にかけて、武蔵野美術大学において清水多嘉示資料展が開催されました。第1期は「諏訪からパリへ—清水多嘉示の形成期」と題し、7月4日～8月6日まで武蔵野美術大学図書館展示室で、第2期「昭和の記録—清水多嘉示の道程・敗戦まで」は同大学美術館展示室にて10月11日～11月12日まで開催されました。

清水多嘉示（1897～1981）は長野県諏訪の出身で、パリ留学中に



第2期展示
（武蔵野美術大学美術館・図書館提供）

ブルデルに師事して彫刻家を志します。帰国後は帝国美術学校設立に参画し、以後、帝国美術学校で彫

刻や西洋画を指導する一方、数々の作品を製作しました。昭和14年から昭和19年までは、本学専門部芸術科でも教鞭をとりました。

今回の展示は、武蔵野美術大学共同研究「清水多嘉示の美術教育について」の研究成果として実施されました。日本近代彫刻史の一時代を築いた清水の資料展には初公開資料が数多く出展され、中には本学専門部芸術科資料も展示されていました。



第1期展示
（武蔵野美術大学美術館・図書館提供）

文理学部110周年記念展示会（文理学部資料館）



法律学校や現在のキャンパスに最初に設置された世田谷予科などの資料が展示されました。文理学部史では、第1期生の澤田大多郎氏から寄贈された学生帽といった、当時の学生たちから寄せられた資料などが展示されました。

文理学部の前身は、明治34（1901）年に設置された日本法律学校高等師範科で、昨年で創設110周年を迎えました。同学部資料館では平成23年11月14日（月）から12月20日（火）まで、「Discovery! 文理学部～向き合って、その先へ～」と題する記念展示会が開催されました。

展示内容は、「文理学部前史」「文理学部史」の2部構成で、前史では、学祖山田顕義にはじまり、日本



また12月10日（土）にはこの展示に関連した講演会「日本大学及び文理学部の歴史」が催され、当課の高橋課員が講師を務めました。



「歯学部・学祖・日大」展

平成23年10月21日（金）～22日（土）の桜歯祭に際して、歯学部図書館2Fの閲覧室で大学史資料展示を開催しました。歯学部関係の資料の他に、学祖山田顕義の義歯や墓所整備時の調査資料などを展示。学生や教職員など、2日間で140名が来場しました。

全国大学史資料協議会2011年度総会ならびに全国研究会



全国研究会（皇學館大学記念館）

平成23年10月5～7日、三重県の皇學館大学において上記の全国研究会が開催されました。皇學館大学渡辺寛名誉教授の「皇學館の創立—明治15年と学校史—」と題した記念講演は、会員・学生・教職員で会場が満員となる盛況ぶりでした。

全国研究会は、昨年の東日本大震災を踏まえ「災害とアーカイヴズ」という統一テーマで進められました。大学アーカイヴズが災害時に備えて日頃から留意すべき点など、あらためて考える良い機会となりました。

見学会では、皇學館館史編纂室大平和典氏の案内と渡辺名誉教授の解説で皇大神宮（内宮）とその周辺を巡見しました。

